

「東日本大震災 10年」

2月13日夜の11時過ぎ、この地方は、震度6強の地震に見舞われた。家が壊れるかと思ったほどの揺れで、本当にびっくりした。すぐ津波を想像したが、間もなくその心配はないという画面がでてホッとしたものの、余震が続き津波の不安は消えなかった。震度6強は、10年前のあの震災以来だと思う。マグニチュードは7.3、震源は、相馬沖、深さ約60kmだという。

特に新地町、宮城県の山元町辺りは、局所的に、瓦を中心とした家や塀の被害が酷い。軒並みブルーシートである。墓地の墓石の転倒、移動は10年前よりずっと激しい。常磐道は相馬-新地間で土砂崩れがあり、新幹線も県内は10日程不通となった。相馬高校は、体育館が使えなくなり、校舎も傷んだ。相馬市、新地町の体育館など公共施設の被害も大きい。自分の住んでいるここは断水になったが数日で回復した。震源が深く、津波が発生しなかったのは不幸中の幸いであった。

**震災、原発事故10年に合わせ
被災地の動きまとめる**

福島の大公書医学研究
室助教などを務めた
福島市の佐藤政男さ
ん(右)は、東日本大震
災と東京電力福島第一
原発事故から十年とな
るの前に「福島原発
事故10年後のゆくえと
新たな課題」を出版し
た。

原発事故から六年後
の二〇一七(平成二十

福島市の佐藤さん出版
九)年に出版した前作
以降の被災地の動きを
まとめた。福島民報な
どの報道などをもと
に、原発事故が地域社
会や住民にどのような
影響を与えたかをまと
めた。国や東京電力を
相手取った裁判の経過
などもつづけている。

佐藤さんは相馬市出
身。相馬高卒で東北大
薬学研究所博士課程修
了。薬学博士。震災時
は福島県で暮らしてい
た。古里のためにでき
ることを模索し二〇一
二年秋に福島市に転居
した。「震災から十年
がたっても県民生活に
影響が出ていることを
全国の人に知ってほし
い」と話している。

合同フォレストから
の発行。価格は千七百
六十円(税込み)。主
要書店やネット通販で
扱っている。



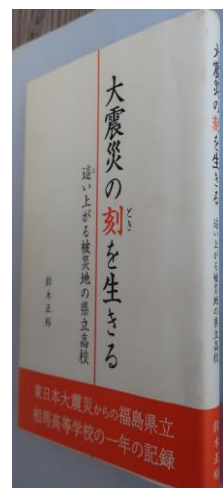
本を出版した佐藤さん

東日本大震災から10年、3月11日は各地で慰霊の式典も行われた。

未曾有の地震と大津波で家族を失った方々の悲しみは、命ある限り癒えることはないだろう。また、原発事故後の発電所の処理の道筋は全く見えていない。

左は、今年2月21日、福島民報の記事である。「福島原発事故10年後のゆくえと新たな課題」の著者、佐藤政男氏は、昭和38年卒、中村出身である。

「大震災の刻を生きる」～這い上がる被災地の県立高校～は、大震災当時、相馬高校の事務長であった鈴木正裕氏が、



大震災直後の混乱から、学校や先生方、高校生たちが格闘し奮闘する姿、事務長が直面した多くの難題等について、相馬高校全体を見渡し活写した貴重な一年の記録である。

2012年7月の発行、制作印刷は(株)民報印刷である。

2021年(令和3年)3月1日 民報 (朝刊)

相馬高 長谷 暁美さん(南相馬市)

福島医大医学部に合格

震災経験 医療の道へ

相馬市の相馬高三年の長谷暁美(はせ・さとみ)さん(17)は、南相馬市原町区Ⅱは、福島医大医学部の学校推薦型選抜に現役合格した。「子育て世代の方々や子どもたちに安心を与えられる小児科医を目指したい」と意欲を見せている。

長谷さんは小学二年生の時、東日本大震災に遭った。震災の現場で使命感を持って活動する医療者の姿を目の当たりにし、医療の大切さを実感するとともに憧れを抱いた。

信頼される小児科医に

福島医大医学部に合格し、将来は小児科医を目指す意欲を語る長谷さん



左は、小学校2年生の時の大震災での経験が、医学への道を目指すきっかけになったという長谷さんの記事である。

(3月19日 村山記)